

(雜 錄) ○再び三崎産巨形「アウリクラリア」に就て

は只口器及び第一歩行肢を有するのみ、下頤と第一歩行肢とは觸覺を司る具となる、上頤には好く發達したる鉗を有す、聽毛なし……………

第三目避日類(Solifuga)

(一)、呼吸器は前體又は後體の内何れか一つにあり又は全然欠損す、第一及び第二歩行肢の間に著じるしき縊れなし、下頤の鉗は發育よからず

(イ)、聽毛は歩行肢の數對にあるか又は其内一對のみにあり、前體と後體との區別明らかな

(い)、聽毛は下頤にもあり、後體は甚だ細き柄によりて前體に連らなり後體は多くは環節に分たれずして常に紡錘突起を有す 第四目眞正蜘蛛類(Araneida)

(ろ)、聽毛は歩行肢にのみ存す、後體は明らかに環節に分たれ太き柄にて前體に連なり紡錘突起なし……………

第五目觸脚類(Pedipalpa)

(ロ)、聽毛は全然欠損するか又は體軀上にあり、最後の歩行肢の後ろに於て前體と後體との區別なきか又は僅かの境界あり

(い)、第二對の歩行肢は伸長して觸覺を司る器となる二個の眼は一つの凸丘の兩側にあり、體は常に明白に環節よりなる……………

雜 錄

……第六目長脚類(Phalangia)

(ろ)、第二對の歩行肢は他の歩行肢と著じるしき差なし、眼は(若し存在せば)前體の側邊にあり、體は不分明に環節に分たる……………第七目壁蝨類(Acarida)

(奥村多忠)

●再び三崎産巨形「アウリクラリア」に就て

此頃故箕作博士の採集に係る標本を調べ居る内、圖らず嘗て本誌二七〇號五〇—五一頁、及び二七三號二九頁に報告して置いた彼の稀有なる海鼠幼蟲を數多發見し、且之に混じて更に別の一種のあるを見出した故、之を報告し、併せて前種に就いて尙多少の補遺的記述を試みたと思ふ。

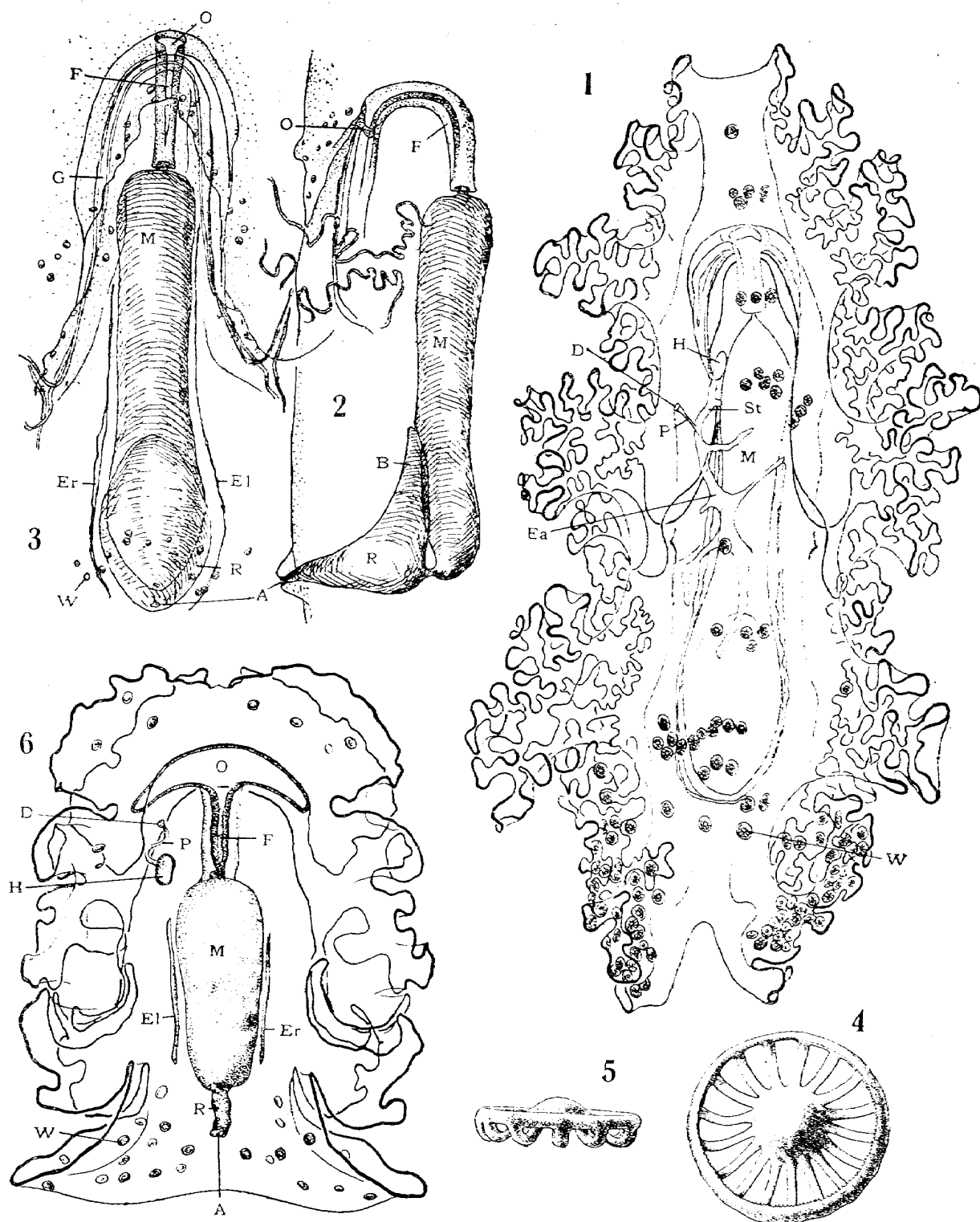
「アウリクラリア」甲號(挿圖2—5) 之は以前紹介した者で、三崎に於ける發見の由來等に就いては既に述べたのである、概してCHON氏がカナリア島で發見した *Auricularia nudibranchiata* (挿圖1) に酷似して居る

が多少の興味ある事實を見た故、日本動物學彙報第七卷第五冊にも簡単に報告をして置いた。

(713)

動物學雜誌第二千七百八十八號

(雜 錄) ○再び三崎産巨形「アウリクラリア」に就て



- 1「アウリクラリア・ヌディブランキアタ」背面全形。凡二十二倍
(クーン氏原圖)
2「アウリクラリア」甲號、消化管及纖毛帶の一部を示す。凡十一倍、左側面。
3同上、腹側面。
4同上骨片。凡二百七十倍、平面。
5同上、側面。
6「アウリクラリア」乙號、背面全形。凡二十四倍。
略字解 A 肛門、B 盲囊狀肥大部、D 背孔、Ea 前體腔(又ハ軸竇)、El 左側體腔、Er 右側腔、F 食道、G 口域、H 水腔、(環形水管の基原)、M 胃、O 口、P 孔、R 末腸、St 砂管、W 輪狀骨片。

體の大きさ、纖毛帶の複雑の度、出現の時期等に關して、我が標本とクリーン氏の夫と相違せる事に就ては既に申した通りである、生きたのを見ると全體透明であつて、纖毛帶は淡紫色を呈し、體表は一面に細かい黒點が飛白の様に散布し(2及3)、顯微鏡で見ると此の黒點は赤褐色不定形の色素細胞で、絶えず「アメーバ」様運動をして居る。輪狀をなせる骨片(4及5)は特に體の後部に多く集り、直徑○・〇七乃至○・一〇二五耗、中央部に孔なく、盃狀をなして凸面が體表に向ふ様に位し、車輻の數十一乃至十七個、周圍の環は内面に細かい鋸齒を生じ居るを見る。

消化管はクリーン氏の報告せると同じく、弓狀に曲つた食道(2及3F)から急に瓜形の大きな胃(M)に續き、其の腹側の後端で狹い通路に依つて末腸(R)に移る茲には前方に延びた大きな盲囊(B)があつて、呼吸樹の基原であらうと想像せられて居る、肛門(A)は末腸の後端、腹側に於て開く。食物の通過する狀は、洋紅の細末を水に混じて見る事が出来る、先づ體側から斜に前腹方に走る溝狀の口域(3G)には纖毛に依つて起つた水流があつて細末を口部に運び、口に入ると一回の嚥下で直に胃に入り、これから極めて徐々に後方に下つて、其の儘末腸に送られる、末腸では數回環狀に流轉して後、遂に肛門から排出せられる。

體腔(3Er及El)は胃の左右に位して殆ど其の全長に沿

うて走り、多少背腹に幅を擴げ始めて居るが、茲に特に注意すべきは、大形な標本には食道末部の左側に環形水管の基原(水腔)が現れ居り、且之に數個の小突起があつて將來の觸手水管を指示して居る事である。從來の例にあつては砂管は直にこの水腔に通じ居るのであるが、此の場合では、左側に扁して背孔を以て開口せる砂管(實は孔管)の他端は、極めて薄い膜で覆はれた管を介して間接にかの水腔に續き、この薄膜の管は更に後方に向つて幾つかの枝に別れて居る(1Ea參照、D背孔、P孔管)。クリーン氏は此の管を以て環形水管の基原なりとなし、その前後の端が斜に延びて遂に消化管を抱くに至るであらうかと想像した、蓋しその標本には余の見たと如き立派な水腔が別に形成せられては居なかつた故に此の誤れる考へを起したものである、偕然らばかの薄膜に包まれた分岐せる管は何か、余はその位置より判斷して、從來前體腔(Anterior enterocoel)軸竇(Axial sinus)或は又穿孔囊(Madrepore)なると呼ばれたものに相當するものと考へたい、そして水腔と孔管との間を連絡する部分(St)が眞の砂管と名づくべき所であると思ふのである。

以上は余の觀察の要旨であるが、頃日丁抹のMORTENSEN氏より、余の報告に對して二三の注意を促され、余がクリーン氏以後斯かる幼蟲の報告あるを見ずといつたのに對し、モ氏が嘗て報告せる *Auricularia plicata*, A. minor (本誌二七三號二九頁)は實に此の類であると云ひ、

又余が日本産の者を以て *A. nudibranchiata* に同定せんとする傾向あるを同意し難じとせられた、今之等に就ての答辯は茲には省くけれども、前二回の本誌上の報告に於て日本産の者とカナリア島産の者とを全く同一種と爲した事は茲に一先づ撤回した方が妥當であらうと思ふ、但し以前にも云つた通り、今新に之に假の學名を命ずる事も差控えて置く積りである。

偕、此の幼蟲の將來に關しては全く不明である、モ氏が深海産の *Elasipoda* 類に屬するものであらうと云つて居るのは、たゞ此の類に屢々末腸から盲囊狀の突起が生じて、呼吸樹と相同の器官を形成し居る事と、彼のユメナマコの如く此の類は何れも艶麗な形態色彩を有し居る事などが似通つて居る所から考へたものらしい、又米國の H. L. Clark 氏から *Chiridota regalis* Gr. の幼蟲と思ふと云つて來られたが、これは無足類に屬して輪狀骨片を有する者である所からの思ひ付きと見えるけれども、輪狀骨片は此の屬のみでなく前記「エラスポダ」の多數にも、多少の違はあるが輪狀骨片がある、加之、幼蟲の有する骨片は成體に移るとき全然新に別な形に造り替へられるものであつて、成體にある骨片の形を以て直に幼蟲の夫と比較する事は出來ないものである以上、ク氏の想像遽に信ずる事は出來ないと思ふ。

「アウリクラリア」乙號（挿圖）之は今回たゞ一個の標本を發見したのであつて、明かに前類とは異なる者

（雜 錄）○再び三崎産巨形「アウリクラリア」に就て

であるが、余はいま之が研究に費すべき時を有せず、且余の如き初學者には唯一個の標本では充分な觀察も爲得ぬ事故、過日前類の標本と一緒に之をモルテンセン氏の許に送り、其の研究を托した、標本の爲にも幸福と思ふのである。同氏は目下又新しい多くの標本を得て其の報告を起草中である故、若し幸にして余の送つた標本が無事に氏の手許に届くならば、必ずや面白い觀察があらうと思ふ、他日同氏の報告を見るとき、其の梗概を紹介する事とし、今は唯、極くザツと余の此の標本に就いて見た所を記すに止めやうと思ふ。

此の標本は長さ約三耗、幅二耗四分一、割合から云へば前類に比して著しく幅が廣い、生時の色は知れないが保存せられた所では無色である。一見して直に前類と區別し得べきは、今云ふ如く幅の廣い事の外、纖毛帶の曲線が頗る粗い事、纖毛帶の左右の者が前端では極く近づいて居るのに後端では遠く距つて居る事、等であるが、なほ詳しく調べて見ると、食道(F)や胃(M)が餘程短かい上に末腸(R)は管狀で、一つも盲囊狀の肥大部を有しない、水腔(H)は現れて居るが、前類に見た様な前體腔はザツと見た余の觀察では見出さなかつた、そして直に孔管(P)を通じて背面左側に偏して背孔(D)を以て開口して居る。輪狀の骨片(W)はその數概して少く、且つ小形であつて、直徑凡そ○○五五乃至○○七耗位、形や位置は前類のと全く同様で、矢張り環の内面に鋸齒を有し

車輻の数は通常十四個であるが、稀に十三個又は十五個の場合もあつた。

之以上詳しい事は見なかつたので、委細はモ氏の研究発表を待つ事にするが、從來知れた幼蟲では、モ氏が *minor* の名を以て、フェルナンド・ノロンハ附近から獲た

標本に就て記載したもの(本誌二七三號二九頁参照)と最もよく似て居るけれども、之は輪狀骨片に就ての詳細がわからず、且大さや纖毛帯の迂曲の度が我が標本程發達して居ないので、充分に比較する事は出来ない。

讀者諸氏にして、臨海實驗の折、是等の幼蟲を上曳の獲物の中に發見せらるゝ事があつたならば、何卒惠與の勞を惜まれざらん事を願ふ。殺すにはオスミウム酸又は昇汞を用ゐ、酒精に保存せらるれば宜し、酸を用ゐ、又はフォルマリンに保存した標本では大切な骨片が溶け去つて、査定に不便である。

(大島 廣)

●第一回萬國人種改良會議

ゴルトン逝けるも

其遺業は不朽に、彼の唱道せる人種改良論は、世界の各隅に其紹述者を得るに至り、現に本邦にも、斯學に關する二三の著述の出版せられ、生物學者のもの以外、猶、浮田博士の如き眞摯なる學者の評論の發表せらるゝを見るに至れり。是機運に乗じ、此度各國同好の士相會して、今後の發展の基礎を定めんとすといふ。其會同の發企者より、東京理科大学動物學教室の渡瀬教授に寄せ來れる趣意書次の如し。

人類の相集まりて社會を成せる以來、絶えず其情態に幾分の變化を來し、社會各員間生存競争の峻烈を輕減したり。然れども其羸弱者體質の劣等なるより起る必然の結果を阻止すべき實力、願望を有するに至りしは近年の事に屬す。而かも他人の不幸に對する同情、及之を緩和する力の大に増進するに連れて、淘汰の作用を發すべき事情に劇變を生じ、最早、脆弱や不能は、個人若くは人種の驅逐を決するに足らざるに至れり。されば各社會は、自ら其最強者、即ち最も有益にして、最も價值ある者の存續を保庇せざるべからざるや疑ふべからず。然るに事實は是に反し、殆んど凡ての社會は、實に體質・智能共に完からざる者に、子孫を遺すを許すのみならず、又天賦の資質に於て優等なるものゝ資財によりて、其存續を計るすらもなすが如き組織の下に在り。斯の如くにして、諸種の逕路を辿り、各種の理由に基き、凡ての文明社會に、劣適者撰擇の現象を生ず。是れ人類の將來に取りて重大なる禍根といふべし。而かも獨り劣者系統排除の妨げらるゝに止まらず、多くの社會に於ては、又優者の驅逐を傍觀し、且つ其勢を助長す。

斯の如き社會政策に起因する避くべからざる結果は、人類の退化にして、進歩を阻絶せしめ、且つ文明破壊の凶兆たるべきものたるや明かなり。若し是に反し、優者の益増を助成し、劣者系統の斷絶を計るの政策にして實行せらるれば、人類の改良亦望み得べく、其繁榮亦限り